

旅と人生 串田孫一

旅と人生、ということだと皆さん方もすぐこういうことをしゃべ

るだろうとお考えになっていると思うんです。旅とは人生にとつて大切なもの、というほどでなくてもためになるとか、旅の印象が普段の生活にどういふ影響を及ぼすかとか、あるいはもう少し昔からの考え方で人生というのは旅のようなものであるとか、そういうことを多分いろいろ思うていらっしやると思うんですけれど、あたりまえのことをいってもいいのかどうかかわからないので、なるべくそういうことはいわないようにしようと思つています。ただうまくいかないで、結局いま申し上げたようなことにもどつてきてしまふかもしれないけれども、その辺のところをおことわりしておこうと思ひます。

高等学校のころに友だちと二人で一生懸命読みましたボードレールの詩の中で、ボードレールっていう人は「旅へのいざない」とかいふ。いろいろ旅の詩を書いておられますけれども、その中で、本当の旅人というのとは自分が旅に出たくてしょうがなくなつて出かけて行く人だということを書いてあるところがありません。これは大変大切なことなんで、私たちが旅でなくても何かをしたいっていうときに、それがもう本当にしたくてどうしようもならなくてするっていうのが

純粹なんだろうと思ふんです。

現在私たちがどういふ風に生活してゐるかっていうと、いてもたつてもいられなくてやるっていうことをほとんどしないんで、これはしなければならぬからする。たとえば旅行をする場合でも人から誘われるから、三度に一度くらいはあんまり好きでない友だちだけれどもいっしょに行つてやるうとか、そういう義理でかためられている生活をしているような気がするんです。それで旅をするときもいまボードレールがいったように、本当の旅人っていうのは、出発したい一念で出発して行く、それが本当の旅人だというそういう旅のしかたを私たちはもうほとんどできないし、不可能になつていく。それはだれもそういう旅をしちゃいけないっていつてないんですけれども、それができなくなつていく。大変悲しい状態じゃないかと思ふんです。

もう一つ、作曲家のワグナーが、人間の心の中にさすらいを求め、その気持ちは毎日毎日の変化を求め、そういうものがあつて初めて人間ていふのは生きてるんだつていつています。同じことが一つの習慣になつて、生活の中に入つてきてしまふとつてもがまんできないような心の状態、そういうものを感ずる人が本当に生

きている人だつていうことを、ワグナーが手紙の中だつたと思ひますけれど、もいつたのを、僕は何となく記憶してゐるんです。ポードールとワグナーを比較したりするわけじゃありませんけれども、この二つの気持ちちつていうのは私やはりこれから考えてみることにきつかけになるんじゃないかと思ひます。

もう一つここでちよつとつけ加えますと、「さすらい」と「さまよい」つていう、紙に書けば彷徨と漂泊でしょうか。これはこじつけかも知れませんが、漂泊つていうのは「さすらい」じゃないか、これに対して「さまよい」は彷徨ですね。そういうふうに考へてみますと、漂泊と彷徨とはだいぶちがうように思ふんです。似たような言葉ですけれども、むしろ対立してる言葉のように思ふんです。「さすらい」つていうのは本当に氣ままで、風が吹けばそちの方へ木の葉がころがって行つて、そしてまた水たまりがあればしばらくそこに浮かんできて、その水たまりがかわいてしまひますと、今度は風が吹いてくれればまたころがり出す。川に落ちれば流されて行くという、そういう一つの生き方、それが僕は「さすらい」つてもんじゃないかと思ふんです。

それに対して「さまよい」の方は、何かこの目的つていっちゃはつきりしすぎるんですけれども、自分がさがしたいものとか、あるいはこうしたいという一つの願ひとか夢とかそういうものがあらかじめあつて、それをさがすためにこちらの道へ行つてみたり、人によつてはすぐあきてしまつて、進んで行くことを断念して片方の道をもた選んでみる。うろろう向こうへ行つたりこつちへ行つたりしながら、とにかく夢の実現を最後に夢みてそこへ近づいてゆこうとする、一つのやっぱり努力は努力なんです。第三者から見ていると、

「さすらい」と「さまよい」とはちがわらないんですけれども、しかし片方はどっか抜け道がないかとさまよつてゐる。そういうちがひがあるように思ひます。

話を旅に限つた方がわかりやすいかも知れませんが、急にごどこかへ行きたくなつた、試験が近づいてくさくさするからいっそのこととび出してやろうとか、あるいは友だちと何か具合が悪くなつたからくさくさするから氣ばらしに行こうとか、そういう理由も何もなしにちよつと旅行に行つてみようとか、それに近いような氣持ちで、私は少なくとも昔は勝手なところへ出かけておりました。親はずいぶん心配しただろうと思ふんですけれども、家にじつとしていれればじつとしてゐるなりに心配するんで、片目つぶつてれば目がつぶれたんじゃないかと思ふようなそういう心配のしかたを親はするもんですから、どうしようもないんですけれども、一週間とか十日とか時々姿をくらましておりましたが、そういうことがだんだんできなくなるんですね。

だいたい学生のころは、皆さん方もやればまだ可能だと思ふんです。その場合には二人三人でしめし合せて行くということもあるでしょうけれども、だいたい一人で行くよりしょうがないと思ひます。三人とも都合よく仲のいいお友だちが今朝目ざめたら急に旅に行きたくなつたつていうふうに思ふわけないので、本当に氣まままに自分の氣持ちに正直になつて本當に行きたくなつたから旅に出るんだというふうになるなら、これはもう一人のことになつてしまつて思ひます。

私の場合ですとはじめのうちは、旅行した時のことを何かの時に原稿に書く、そういう時はいいと思ふんです。はじめからこの旅行は

三十枚の文章にしてやろうと思つて歩いてるんじゃないんで、そんなこと何も考えないで歩いた、それがだんだん種ぎれになつてきますと、何か旅行のことを書いてくれたっていわれた時にあんまり種がないのも具合が悪いからそのために出かけなければならぬ。それが一つの口実で出かけるんですけれども、自分がしめしめと思ひながら一つの荷物をしょつて、よけいな荷物をしょうことになるんです。せっかく行くんならたとえ海に突き出して半島の先まで行ってやろう、あそこからながめた風景について書いたものがおそらくないから今度は自分で書いてやろう、そういう意気込みができてしまう。それはたいへんいいことだと思つてる方がいらつしやるかもしれないけれども、僕はしかし本当じゃないと思つてですね。

そういう習慣がつくと、なんで旅をするのかつていうことがわからなくなつてしまふ。逆に、自分の文章を書くために旅行している、そういう場合が私の経験では非常に多いんですね。そういう目的の旅といわずに仕事として出かければいいんですけれども、取材旅行なんていって、むこうでけつこうお酒飲んだりなんかして遊んで、費用もむこうで払ってもらえるということで、それだけこつちはいい思いをしているような気になりますけれども、それはそれだけ負担がかかってくる。ポードロールがいったような、本当に行きたくて出かけてきたつていう気持ちはだんだんなくなつてきて、しまひにはセロになつてしまふ、ということだと思つてます。

旅行記とか紀行文というものも、旅行をした結果としてごく自然に自分の中から、またさつき申しあげたように、もう書かずにいられない気持ちでまゝとおきたいつていう書きかたをしているうち、これはいいと思つてます。最初から何か書かされることはもし

可能であればならぬ方がいいように思います。たとえば旅行なるときにも日程をおたてになる時に、ガイドブックに従つていかないといけないうちに思いこんでしまふのはたいへんいけなひんで、むしろガイドブックに絶対書いてないような日程をおさがしになるといい。バスで行つて降りたら五分ほど歩くと思はらし台があるから、そこでカメラのシャッターを二、三回は押し出したものである、そんなよけいなことをいってくれるなつて思ひますけれども、そういうところへ仮に行つてみますと、ガイドブックを片手にしてああそうかつてカメラを出していつしゅうけんめい撮つてるんですね。本当にさびしくなるし、人間ここまで素直になれるもんなかと思つて、じゃなぜ僕のいうことなど聞かないんだらうかと情けなくなりませう。

ご自分で望んでゆく場合にはなにもそんなに素直になる必要はない。氣にいったところがあれば、そこに二三日でも一週間でもおなじところにてやろうつてこと、しかしこれがなかなかできないですね。ずいぶん前にはそういうことを平氣でやつてたんですけれども、二日ほど同じところにて、しかも宿屋でぼやんとしたり、あるいは宿屋の近くに川が流れてたら川のそばへいつて、土手へ腰かけてぼやんとしてゐつてことはほんとにできにくくなる。むしろそんなことをすることが苦痛になつてきましてね、そういうことができるのはまだ若いうちだろうと思つてます。氣に入つたところがあつたならば、そこに滞在する、旅といつしよに必ず滞在を間にまじえて、一つの大きな意味での旅つていうものをお考えになるといいと思つてます。

それで、私がむしろ驚いたことがあります。ドイツのフランクフ

ルトから昔女優さんなどをやったことがあるという婦人が、ひょっとしたずねてきた。自分は日本という国へ生きていううちに一度いつてみたかった、もうずいぶん前からそれは考えていた、それで働きなからお金を貯めて、だいたいこれくらいたまったからいけるっていうことで、しかし飛行機でくるとちょっと足りなくなるんで、香港あたりまで貨物船かなんかに乗ってきて、それで香港から羽田へ着いた。

あこがれの土地へはいる時だけかっこつけようと思ったのかどうか知りませんが、船が香港どまりだったのかもかもしれませんが、飛行機で日本やってきて、僕をたずねてこられた。それでどのくらい滞在できるのかって聞きましたら、五日間日本に滞在して、そして六日目の飛行機で帰ると自分の休暇がいっぱいになるというんです。その時に僕はあわててその五日間にどういふところへ案内しろいだらうかってことを、まず考えたんです。はるばる二十年も三十年もいきたいいきたいと思いつつ日本へせっかきで、それでどこへいっていいかわからない。日本語も全くできない人が困るだらうってことをこっちで考えるのは当然かも知れません。私の中のすぐ近くにちょっと泊れるところがあってそこへ泊めてあったんですけど、これは五日間つぶして案内しなくちゃいけないかと思つたら、ほっといってくれていうんです。それでまあしょうがない、そう本人がいうんですから、迷子になりながらきつとどこかへ行つたんだらうと思つて、帰る前の日にその人またたずねてきたもんですから、この四日間どうしてましたかって聞きましたら、家の近くに——いま小金井ってところにおりますけれど——小金井に公園が二つある。朝から晩まで公園へいって、子供が遊んでいる

のを見てほかにほどこへも行かなかつたなんていう。ちょうど五月でイチゴが八百屋さんの店先にある。イチゴを買って、それからパンを買って公園のベンチに座って、今日はこっちの公園、翌日はあつちの公園と、つまり四日間二つの公園で向こういったりこっち行ったりしてただけですごして、そして帰っていきました。

帰っていく前の日に、やっぱりなにかおみやげを買いたいんじゃないかっていったら、真珠を買うっていうんですね。それで真珠を売っているお店を聞いて連れていきました。いい真珠を買っていくのかと思つたら、ゆがんだパロックという真珠でその一番安い二千円のやつを千五百円にまけさせて（笑い）それだけおみやげにして、もうこれで満足だつてニコニコ笑つて、翌日羽田から飛行機に乗って帰って行きました。その値段を聞いて僕も非常に気が楽になつたものですから、千五百円の真珠を買ってあげまして、それがまたうれしかったのかそれ以来毎年クリスマスになるといろんなものを僕は送つてもらふ。こっちからなんにも送つてやしないのに（笑い）千五百円でずいぶん得しました。そのかたは別に日本旅行記を書くわけでもなし、日本の話をだれにするわけでもない。ご主人は戦争の時になくなつたそうで、一人でどっかの会社へつとめている人なんですけど、そういうことを僕は自分のところへたずねてきた人で経験させられまして、ビックリしたんです。ふだん僕がえらそうに考えていることをその人はちゃんとやつてるところにほんとは驚いたんです。

それからもう一人、英国人のエンジニアで日立かなんかの製作所によべれた人なんです、この人は半年くらい日本にいたもんですから、かたことまでいかないうちな日本語ができるんです。その人も

ひょっこりたずねてきました。リコーダーという笛を自分の楽しみに吹いている人らしいんです。泊っているホテルのフロントから突然電話がかかってきて、こういう人がこれからたずねたいというけれどもいいかっていう。自動車なんかでくるのかと思ったら、ちゃんと電車に乗ってやってきました。赤い表紙の大きな本をもってあとは黒い細長い箱をもっておりながら改札口にいってくれていう。しょうがないから、そこに立っていましたら、その通りの人がやってきて、名前もその時始めて聞いたんですが、聞きそこなうといけないからすぐ紙を出して名前を書いてもらいました。パーカーさんという、万年筆みたいな人で（笑い）二時ごろうちへきてすかりのんびりして、ひとりで笛を吹いたり、僕を相手に笛を吹いたりして、まちがえるところはおんなじようなところを、やっばりまちがえるんですね。だんだん話をしてるうちに暗くなりました。

うちの奥様が（笑い）おそうざいでも食べていかないかっていうてくれていうんですね。おそうざいなんていう英語を僕はおそわったこともない。そしたらなんかわかつたらしくて、ちゃんと食べていってくれました。おはしを左手で持ったり右手で持ったりしながら食べて、ご飯食べたのでまたのんびりして、十二時ごろになってあんまりのんびりしてるから泊まりませんかっていったら、いやかみそりを置いてきたからどうしても帰るって最終の電車で帰っていきました（笑い）。

実ののんびりしてお茶を飲んだり、こっちもそうペラペラ話せませんから、思いついたことを三度くらい口の中でいってからききました（笑い）。家族はどうなんですかと、まあだいたい私と似たようなことで、出発する前にその人の奥さんが自動車の免許を

とった。だから私が帰るころには自動車が減茶苦茶に壊れているだろう。それから子供は受験まぎわで、テレビばかり見てしょうがないから、テレビが壊れたんだけどもわざと直さずに来たとか、だいたいいてるような話ばかりして帰りました。なにしに来たかわからないんですけども、その人もあとから時々手紙をくださるんです。辞書をひいてやると読めるような手紙で、辞書をひいてみると英語で書くのはつらいだろうからローマ字でお書きなさい、なんて英語で書いてありました（爆笑）。ドイツ人の女性と英国人の男性とによって僕も国際的になったわけですが、その二人から、旅行っていろいろのさういふふうにしてやるもんだってことをもう一回考えさせられたような気がします。

それから、僕がつけ加えたいと思ったことがあるんですが、つまり、これから先がちょっとむずかしいんですね。旅行するっていうのは切符を買って、汽車なり電車に乗ってどっか行くことなんです。ラスキンなんて人は汽車がきらいで汽車なんかでどっか行くのは旅行ではないなんていう。日本でもそういうがんこな人がよくいましたけども、ふつう登山靴なんかみんなはいてるのに、わざわざ自分のうちからわらじをはいて、絶対に汽車なんかの乗りものに乘らないで山へ行つたような人が昔はおりましたけれども、もうそういう人はあらかたなくなっている。ところが、そうやってからだをどっかへ移すことによって、私たちは普段の生活から外へ出ることができる。また新しい経験とか、思いがけないことがそこでおこる。いろいろさういった要素がかたまっているのが旅だと思っんです。それから僕がもう一つ考えることは、自分のからだは普段の生活をしていながら、ある時間、一時間でも、時間がなければ三十分で

も十分でもいい、自分の心をどっかへ旅させるということもできると思うんですね。どういうところへ旅させるかっていうと、かつて見たたとえは九州の霧島山っていうのはたいへんよかったから、えびの高原をぼんやり歩いているときのことを思い浮かべよう。そういつた空想旅行ではないんです。僕が申し上げるのは、もう少し観念に高まっているような、形而上学的なことに通じそうなんですけれども、実はそんな複雑なことじゃないんで、ただぼんやりとしていて、そしてある風景を思い浮かべる。その風景っていうのは人間です。それから自分の経験した、あるいは写真なんかで見たような風景しか思い浮かばないと思うんですが、それをただアラスカの雪原であるとか、あるいはアルプスの氷河であるとか、あるいはヒマラヤの風の吹きつけている氷壁であるとか、あるいは太平洋の南の方の島であるとか、そういうことだけでなく、自分でもう少し作ってしまおうんですね。風景をこしらえてしまおう。

時間的なことでいえば、たとえば人類が滅亡してしまって、この地上には生物がなにもなくなる。そうなるとおそらく川なんかかもう流れていない、ひからびた地上かもしれない。そういうところの風景をこれは勝手にこしらえるんですから、ほんとにはすさまじいものになってしまうかもしれないんですけれども、勝手に色を塗って、空を真暗にして、そして山らしいものの残骸が、真赤に残っているようなそういふ風景を想い描いて、その間をひとりであらふら歩く。人類が滅亡して、自分ひとりだけ生き残っているんですからもうだれも不必要な心配をしてくれる人もいない。自分だってなんでも勝手なことができる。いつ死んでもほかに悲しむ人がいなんですから、たいへん自由な状態ですね。そういうことを時々なさると

いい。これ、あんまりこりすぎますと頭がおかしくなりますから、ほどほどになさったいた方がまず安全だと思えますけれども、しかしこれは、やってみるとたいへん楽しいんです。

どこも混んではいなし、それで空気はないかもしれないけれども、空気はいいし（笑い）水はないかもしれないけれども、泉の水はおいしいし、そういう矛盾がたくさんあるような土地に自分で、もう心だけだつたらばふらふらとさまよっていきける。どうしても過去の経験がそこへ入ってくると思いますが、かつて見た滝の景色がよければ、また、やっぱり水がどうしても欲しければ水はまあ許してあげますから、水、滝ぐらいあつてもいいし、箱庭を作るといふか盆栽を作るような気持ちで広大な風景を思い描く。また、ただ風景をながめているだけでなく、その間をふらふらと自分で歩いてごらんになるといい。

心象風景とか、メンタルスケッチとかいうこととはちょっとちがうんで、ある日本の土地を歩いている、そういう時の心の中の状態を描くんでなしに、全く新しい世界を作る。たいへんシュールな感じのものになってると思うんですね。ダリの絵のようなものができれば、ご自分でただ絵をながめているのところが、その中を歩いていって、その山の裏側へいってみたら寶石がたくさん落ちていた。でも、寶石なんかほんとになんにもならないもんですから、それけつと歩いて歩いて（笑い）さぞ気持ちがいいだろうとね。そういうこともひとつの楽しみとして、お金もかかりませんし、食料も持つていかないですむ、かなり高級な空想旅行を、みなさん方もなさるといい。それを最後におすすめておこうと思います。

（文芸学会講演の一部を筆記 千代田初子、塙浩子ほか）